

## どうすれば社会への「わがまま」を言えるようになるのか？

～「意見を言うこと」「参加すること」の抵抗感をときほぐすには～



開催日時：2020年7月11日（土） 運営媒体：Zoom

参加者数：30名（大学生・社会人26名、運営メンバー4名）

話題提供者：伊藤真琴（お茶の水女子大学2年）・浜田未貴（社会人）・別木萌果（岡山大学大学院修士1年）・古野香織（東京学芸大学大学院修士3年）

ファシリテーター進行等：別木萌果さん（岡山大学大学院修士1年）

今回は、立命館大学の富永京子著作『みんなの「わがまま」入門』を題材に、「なぜ社会運動の参加に抵抗感を感じるのか？」「どのようにすれば社会への意見を言いやすくなるか？」ということについて、参加者の方々とディスカッションを通して考えました。当日は、全国各地から34名の大学生や社会人の方々にお集まり頂き、グループディスカッションを中心に様々な議論が交わされました。

前半は、本書1～3章の要約をお話したあと、4～5人のグループに分かれてディスカッションを行いました。ディスカッションのテーマは、「自分がわがままを言うことへの抵抗感をなくすためには何ができる？」「どうすればわがままを言いにくい社会を変えられる？」の2つです。1つ目のテーマについては、「私の意見はAだけど、あなたがBを選ぶことを私は否定しない、というところまで伝える」「自分一人だけではないと思える仲間を見つける」「自分の意見に責任を持ちすぎない」というような意見が挙げられました。2つ目については、「まずは安心して発言できる場所をつくる必要がある」「誰がわがままを言いたいと感じているか、想像力を持つ」というような意見が挙げられました。また、教育面での取り組みとしては「生徒会等の活動を通して、わがままから学校の制度が変わっていくプロセスを生徒に見せていく」「コミュニティースクールを作ることで地域がうまく介入していく」「成功しても失敗しても、行動したことを評価する」などの意見が共有されました。



後半は、本書4～5章の要約を参考に、社会への「わがまま」を言うときのポイントや注意点についてお話ししました。「わがまま」は、自分の抱えている「モヤモヤ」を他者と共有することから始められることや、趣味や生活と関連させながら話すと伝えやすくなること、そして、自分の関係ないことについても「わがまま」を言っているのだということが話されました。参加者の方からは、「わがままを言える環境を他人に求めていたが、まずは自分から行動しないと変わらないと気づいた」「安心して気軽に意見交換できる場所があれば良いと思った」などの感想がありました。今回の企画を通して、社会への「わがまま」を言いにくくしている自分自身の考え方や社会の雰囲気について考えることで、その抵抗感をときほぐすヒントをたくさん得ることができました。今後も「わがまま」を言いやすい場所を作っていきたいです。（主な企画運営：浜田・古野・別木・伊藤、報告担当：伊藤）